

岡山県大学図書館協議会平成 22 年度第二回研修会報告書

1. 開催日時：平成 23 年 2 月 17 日（木）13:30～16:30
2. 場 所：就実大学・就実短期大学 E 館 4 階
3. 参加者：県内 19 大学・短大・高専 30 名
4. 司 会：浅野 智子（岡山県立大学附属図書館）
5. 書 記：高畑 都（川崎医科大学附属図書館）
布元めぐみ（ノートルダム清心女子大学附属図書館）
6. 内 容：情報リテラシー（教育）とは何か、その定義・意義を理解するとともに、大学図書館の果たすべき役割を探る。また、実践のためのアイデアを学ぶ。

(1) 開会

就実大学・就実短期大学山本光久図書館長より開会の挨拶があった。

(2) 講演：情報リテラシー教育において大学図書館は何ができるのか

講師：野末俊比古氏（青山学院大学教育人間科学部准教授）

① 大学図書館における情報リテラシー教育

「情報リテラシー」とは「情報を主体的に使いこなす能力」と定義することができ、問題解決、意思決定のために必要なものである。また、その能力とは単なる技能ではなく、メタ認知などの思考や態度を含むものであると理解することが重要である。そして、その習得・向上・維持を支援する意図的な活動を「情報リテラシー教育」ということができる。

情報リテラシー教育のうち、図書館が担う部分が図書館利用教育(指導サービス)である。伝統的には、図書館員が図書館利用者に対して図書館およびその資料の効果的な利用法を指導するものである。

一方で、本来の情報リテラシー教育とは、大学教育全体として情報リテラシーの習得・向上を目指すものである。図書館は視点を変えて、学生を図書館の利用者として見るのではなく、大学の一員として見る必要がある。大学教育全体の中で学生に何ができるかを考えなければならない。情報リテラシー教育は、どのような学生を育成するのかという各大学の建学の精神や教育理念に基づき、大学全体で取り組むべき課題であり、計画的・組織的かつ系統的に行われる必要がある。図書館はその中で、これまで行っていた図書館利用教育を含めた関連するサービスを再構築・体系化し、広義の情報リテラシー教育の中に位置づけていくことが必要になってくる。

② 情報リテラシー教育(指導サービス)を進めるために

教育学の基本的な考え方を取り入れるとよい。司書課程には「教育学」の要素がほとんど教えられていないが、「教える」ヒントとなるものがあるので、いわ

ゆる教職の基礎部分を学ぶ機会があるとよい。また、図書館を大学の組織の1つと意識し、図書館員は(教員ではないが)教育者という意識を持っていてもよいのではないか。

実践にあたっては、①使命・目的、②目標・内容、③段階・順序、④方法・手段、⑤対象といったポイントを押さえた整理を行うとよい。③の段階・順序を整理する際には、入学から卒業までの情報リテラシー教育の内容を一覧(体系表)にして全体像が分かるようにするとよい。そして、進行表や指導案の作成、教材の準備などの手はずを整え、実行に移す。

③ 利用者(ニーズ)をとらえる

必要度「ニーズ(need)」と要求度「ディマンズ(demand)」という2つの尺度を軸に、どこにコストをかけるか、短期的・長期的視点で考えていくことが大切である。基本的には、必要度の高いところから取り組むことになる。

利用者のニーズをとらえる調査をするには、改めてアンケートをとる以外にも、簡単な聞き取りや、他の記入用紙にミニアンケートを追加するなど、その場に合った適切な方法がたくさん考えられる。

また、それぞれの学問分野の主題知識を持ち、学習スタイルを把握することなども利用者の把握には有効である。

④ 実践のためのいくつかのアイデア

- ・参加しやすい形式を取り入れる—その場ですぐできるワンポイントレッスンや、相談会スタイル、出張講座、課題を解きながらの演習形式などがあげられる。
- ・広報を積極的に展開する—利用者用のリテラシー教育の体系表をスタンプカードや双六形式にするなどの工夫ができる。また、広報の場所は、ブラウジングルームやトイレ、記入用紙や入力画面など限りなくあるので、適宜、増やしていくとよい。
- ・「お得感(危機感)」を演出する—「限定」「10分でわかる」などの言葉を使う、景品を付けるなどがあげられる。ときには危機感をあおるのが有効なこともある。

最後に、各館の情報リテラシー教育の内容等は、各々違うべきものではあるが、こういった研修の場において、成功例や失敗例を含めた様々な事例を共有することで、よりよい指導へと繋がっていくと思われる。今後、そういった場が設けられることが期待される。

(3) 事例報告・意見交換・質疑応答

時間の都合上、事例報告・意見交換は行わず質疑応答のみを行い、事前アンケートの質問をもとに、講師より以下のような回答があった。

Q. 担当者が少人数でも、効率のよい方法があればご教示いただきたい。

- A. 現在、実践していることをマニュアル化、パターン化するといった「カタチ」にしておくと、ポイントを押さえた指導が誰でも実施でき、また一人当たりの負担を減らすことができるのでよい。
また、大勢に対しての一斉指導型にこだわらず、課題提出－添削の方式にして時間に余裕のある時に少しずつ行うなどの工夫も考えられる。
- Q. より多くの学生を対象に情報リテラシー教育を継続的に実施するためには、学内他組織・教員とどのように連携していくべきか。
- A. 一つには、情報リテラシー教育は全学的に取り組むべき課題であるため、いろいろな部署から人員を集めたチームをつくることが考えられる。
情報リテラシー教育によって学生がどれだけ成長したかという実績を教員等に示し、協力者を増やしていくといったことも一つの手段である。
連携の仕方は大学によって違うので、カリキュラムや学内組織を分析し、計画を立てることが必要になってくる。
- Q. より多くの学生に情報リテラシー教育を行うには、教員の理解を得ることが近道だと思えるが、どうすれば理解を得られるのか。
- A. 教員は、データや理屈に弱いところがある。情報リテラシー教育を受けたことで学生が「こんなにたくさんの文献を探しだすことができた」「こんなツールを使えるようになった」というように具体的な成果を示すと理解されやすい。

(4) 閉会

岡山県大学図書館協議会研修委員会浅野智子委員長（岡山県立大学附属図書館）より閉会の挨拶があった。

以上